

金属を通して歴史を観る

33. 三角縁神獣鏡は中国鏡か(2)

新井 宏

韓国国立慶尚大学招聘教授

同型鏡の鉛同位体比の類似性

それではいよいよ本論に入ろう。着目点は鉛同位体比の類似性分析である。特に、鉛同位体比分析では同一鑄造材であるならば、どの部分を探ってもほぼ同一の分析値を示すことが知られており、その延長線で同一時期、同一場所で鑄造されたものも類似の分析値を示す傾向がある。精度は劣るがDNA鑑定のようなものである。

したがって同型鏡の相互間でその鉛同位体比がよく似ていれば、おそらく同時に製作されたと判断できるし、あまり似ていなければ他の場所あるいは他の時期に製作された可能性を疑ってみる必要がある。またお互いが同型鏡ではなくとも鉛同位体比が著しく似ている場合には「他人の空似」の危険性もあるが、同一時期、同一

場所で製作された可能性を疑ってみる必要がある。

以上の状況をもうすこし定量的に論議しよう。そのためにAとBの相互の鉛同位体比の類似性を次のように定義する。

鉛同位体類似指数 (%)

$$= \{ |(Pb^{204}A - Pb^{204}B)/(Pb^{204}A + Pb^{204}B)| \times 100 + |(Pb^{206}A - Pb^{206}B)/(Pb^{206}A + Pb^{206}B)| \times 100 + |(Pb^{207}A - Pb^{207}B)/(Pb^{207}A + Pb^{207}B)| \times 100 + |(Pb^{208}A - Pb^{208}B)/(Pb^{208}A + Pb^{208}B)| \times 100 \} / 4$$

すなわち一般的には鉛同位体分析結果は Pb^{207}/Pb^{206} 、 Pb^{208}/Pb^{206} のように比で示されているが、これを通常の原子%として表示し直し、さらに上式で各々の鉛の相対誤差の絶対値を平均して算出する。

このように定義した類似指数が、まず同じひとつの鏡

表1 同じ鏡の鉛同位体類似指数(分析の再現性)

鏡出土地	鏡名称	記号	Pb206 /Pb204	Pb207 /Pb206	Pb208 /Pb206	鉛同位体類似指数 (%)					
						組合せ	指数	組合せ	指数	組合せ	指数
長野県森将軍塚古墳	三角縁神獣鏡破片1	A1	18.212	0.8606	2.1295	A1-A2	0.045	A2-A4	0.029	A3-A7	0.021
	三角縁神獣鏡破片2	A2	18.199	0.8608	2.1285	A1-A3	0.037	A2-A5	0.020	A4-A5	0.023
	三角縁神獣鏡破片3	A3	18.200	0.8601	2.1290	A1-A4	0.016	A2-A6	0.043	A4-A6	0.048
	三角縁神獣鏡破片4	A4	18.213	0.8606	2.1288	A1-A5	0.026	A2-A7	0.047	A4-A7	0.029
	三角縁神獣鏡破片5	A5	18.198	0.8608	2.1294	A1-A6	0.064	A3-A4	0.038	A5-A6	0.055
	三角縁神獣鏡破片6	A6	18.219	0.8605	2.1284	A1-A7	0.030	A3-A5	0.027	A5-A7	0.037
	三角縁神獣鏡破片7	A7	18.213	0.8599	2.1286	A2-A3	0.028	A3-A6	0.068	A6-A7	0.055
島根県神原神社古墳	景初3年三角縁神獣鏡	B1	18.277	0.8577	2.1227	B1-B2	0.038				
		B2	18.261	0.8573	2.1226						
大和柳本天神山古墳	仿製獣形鏡 M-23	C1	18.293	0.8578	2.1168	C1-C2	0.049				
		C2	18.276	0.8577	2.1187						
大和柳本天神山古墳	仿製獣形鏡 M-7	D1	18.058	0.8642	2.1387	D1-D2	0.049				
		D2	18.044	0.8647	2.1378						
大和柳本天神山古墳	三角縁変形神獣鏡	E1	18.261	0.8580	2.1248	E1-E2	0.075				
		E2	18.250	0.8580	2.1223						
春日市須玖岡本D地点	鳳凰鏡	F1	18.421	0.8520	2.1125	F1-F2	0.070				
		F2	18.402	0.8518	2.1105						
春日市小倉立石	細線獣帯鏡	G1	17.747	0.8761	2.1618	G1-G2	0.076				
		G2	17.713	0.8760	2.1605						

表2 同時に鑄造した同型鏡の鉛同位体類似指数

鏡出土地	鏡名称	記号	Pb206 /Pb204	Pb207 /Pb206	Pb208 /Pb206	鉛同位体比類似指数 (%)			
						組合せ	指数	組合せ	指数
大阪府紫金山古墳11号 大阪府紫金山古墳6号	仿製三角縁三神三獸鏡	H1	18.213	0.8593	2.1209	H1-H2	0.064		
		H2	18.241	0.8587	2.1216				
大阪府紫金山古墳5号 大阪府紫金山古墳8号	仿製三角縁三神三獸鏡	I1	18.102	0.8629	2.1328	I1-I2	0.157		
		I2	18.186	0.8599	2.1230				
福岡県一貴山銚子塚S2 福岡県一貴山銚子塚S3	仿製三角縁三神三獸鏡	J1	18.152	0.8613	2.1238	J1-J2	0.037		
		J2	18.158	0.8606	2.1217				
福岡県一貴山銚子塚N2 福岡県一貴山銚子塚S4	仿製三角縁三神三獸鏡	K1	18.286	0.8565	2.1202	K1-K2	0.090		
		K2	18.273	0.8572	2.1177				
福岡県前平原古墳墓 福岡県前平原古墳墓 福岡県前平原古墳墓 福岡県前平原古墳墓 福岡県前平原古墳墓	仿製内行花文八葉鏡	L1	17.654	0.8794	2.1672	L1-L2	0.100	L2-L4	0.067
		L2	17.711	0.8780	2.1653	L1-L3	0.104	L2-L5	0.176
		L3	17.649	0.8794	2.1703	L1-L4	0.106	L3-L4	0.030
		L4	17.654	0.8797	2.1715	L1-L5	0.120	L3-L5	0.080
		L5	17.686	0.8802	2.1733	L2-L3	0.097	L4-L5	0.110

の中でどうなっているかを調べてみる。幸いなことに同一鏡について分析した事例が表1のようにかなりある。表中には同一鏡内の分析値間の鉛同位体類似指数を計算した結果も付記する。この結果から見ると同一材の場合、類似指数は最大でも0.075%であり、80%は0.05%以内に納まっている。

一方、同型鏡で同時に製作された場合の類似係数はどうなっているであろうか。この場合、舶載鏡の場合は複製鏡の可能性があるので対象とできない。対象とできるのはむしろ仿製鏡の場合である。もちろん仿製鏡の場合でも異なった時期に複製された可能性を排除できないが、同時製作の可能性のほうが高いからである。事例を整理すると表2のとおりで、類似指数は最大で0.18%、86%が0.12%以内に納まっている。

ところで一般的に三角縁神獸鏡同志ではどの程度の

鉛同位体比類似係数になっているであろうか。そのチェックのため、いわゆる舶載三角縁神獸鏡57面についてその相互間の鉛同位体類似指数を計算してみた。それらの鉛同位体類似指数を分布として捉え、同一鏡の場合や同時製作鏡の場合と比較したのが表3である。一般の三角縁神獸鏡の間では鉛同位体類似指数は最大値で0.8%、約3分の2が0.15%を超えている。類似指数が0.05%以下の場合も5%あるが、この中には同型鏡の場合も多く含まれているので、それを除くと4%程度である。

これらの結果から、たとえ同型鏡であっても、類似指数が0.20%を越えている場合には、別の時期あるいは別の場所で製作された可能性が高いし、その一方で鏡型は異なっても類似係数が0.05%以下と非常に類似している場合には、同時に製作された可能性が高いと考える必要があるであろう。

以上のような観点から、舶載三角縁神獸鏡とそれに類似する紀年鏡のうち、鉛同位体比の判明している鏡について、相互間の鉛同位体類似指数を計算して表4に示す。

表中にアミかけで示すように、舶載鏡の同型鏡では、同一チャンスに製作されたとは考えにくい組合せが数多くある。すなわち類似指数が0.10%以下で同一チャンスに製造された可能性の高い例が8組なのに対して、類似指数が0.20%以上で同一チャンスとは考えにくいものが12組もあり、複製そのものが時期を変え場所を変えて繰り返し日常的におこなわれていたことを示唆している。

表3 同一鏡、同時製作鏡の場合と一般三角縁鏡爛の鉛同位体類似係数比較

鉛同位体類似 係数分布	同一鏡内		同時製作鏡 相互間		一般三角縁 鏡間	
	件数	累積%	件数	累積%	件数	累積%
0.000~0.050%	20	74	2	14	75	5
0.051~0.100%	7	100	6	57	228	19
0.101~0.150%			4	86	286	37
0.151~0.200%			2	100	314	57
0.201~0.300%					338	78
0.301~0.400%					187	89
0.401~0.500%					97	96
0.501~0.600%					49	99
0.601~0.700%					14	99
0.701~0.800%					8	100

表4 同型鏡の相互間の鉛同位体類似指数（アミかけ部分は別々に製作された可能性が高いもの）

鏡出土地	鏡名称	記号	Pb206 /Pb204	Pb207 /Pb206	Pb208 /Pb206	鉛同位体比類似指数 (%)					
						組合せ	指数	組合せ	指数	組合せ	指数
静岡県連福寺古墳 椿井大塚21	三角縁三神五獣鏡	M1	18.184	0.8604	2.1281	M1-M2	0.187				
		M2	18.311	0.8593	2.1262						
椿井大塚07 椿井大塚08	三角縁四神四獣鏡	N1	18.067	0.8654	2.1395	N1-N2	0.089				
		N2	18.030	0.8656	2.1380						
椿井大塚09 椿井大塚10	三角縁四神四獣鏡	O1	18.289	0.8587	2.1262	O1-O2	0.205				
		O2	18.162	0.8588	2.1248						
甘木市神蔵古墳 山口県御家老屋敷古墳 川崎市加瀬白山古墳 椿井大塚13 椿井大塚14 椿井大塚15	三角縁四神四獣鏡	P1	18.233	0.8604	2.1304	P1-P2	0.279	P2-P4	0.119	P4-P5	0.179
		P2	18.071	0.8644	2.1381	P1-P3	0.172	P2-P5	0.275	P4-P6	0.125
		P3	18.297	0.8561	2.1190	P1-P4	0.211	P2-P6	0.094	P5-P6	0.181
		P4	18.128	0.8628	2.1307	P1-P5	0.083	P3-P4	0.331		
		P5	18.222	0.8596	2.1270	P1-P6	0.185	P3-P5	0.154		
		P6	18.126	0.8631	2.1362	P2-P3	0.429	P3-P6	0.335		
椿井大塚11 福岡県那珂八幡古墳	三角縁五神四獣鏡	Q1	18.310	0.8565	2.1186	Q1-Q2	0.328				
		Q2	18.135	0.8627	2.1333						
長岡京市長法寺南原古墳 椿井大塚18	三角縁四神四獣鏡	R1	18.394	0.8523	2.1140	R1-R2	0.056				
		R2	18.426	0.8514	2.1121						
群馬県柴崎蟹沢古墳 山口県竹島古墳 兵庫県森尾古墳	正始元年三角縁 神獣鏡	S1	18.074	0.8630	2.1342	S1-S2	0.278				
		S2	18.250	0.8606	2.1313	S1-S3	0.209				
		S3	18.196	0.8600	2.1275	S2-S3	0.154				
筑紫野市原口古墳 椿井大塚19 福岡県天神森古墳 福岡県小倉区御座1号墳	三角縁三神三獣鏡	T1	18.267	0.8578	2.1216	T1-T2	0.168	T2-T4	0.182		
		T2	18.239	0.8615	2.1300	T1-T3	0.032	T3-T4	0.074		
		T3	18.267	0.8573	2.1201	T1-T4	0.067				
		T4	18.225	0.8585	2.1236	T2-T3	0.200				
椿井大塚20 椿井大塚31	三角縁三神五獣鏡	U1	18.239	0.8623	2.1316	U1-U2	0.194				
		U2	18.197	0.8598	2.1262						
京都府広峯15号墳 辰馬考古資料館	景初4年盤龍鏡	V1	18.062	0.8643	2.1365	V1-V2	0.239				
		V2	18.193	0.8602	2.1287						
京都府大田南5号墳 出所地不明、個人蔵	青龍3年方格規 矩鏡	W1	18.208	0.8588	2.1246	W1-W2	0.091				
		W2	18.171	0.8613	2.1305						

能性が高い。

異なる年の紀年鏡を一緒に製作

このような結果を受けて、正始元年、景初3年、景初4年、青龍4年など紀年銘のある舶載鏡の相互の鉛同位体類似指数を計算したのが表5である。

これを見ると、正始元年銘三角縁四神四獣鏡の同型鏡に関しては、群馬県柴崎蟹沢古墳出土のものと同県竹島古墳出土あるいは兵庫県森尾古墳出土のものが同一時期同一場所で製作されたとは考えにくく、また景初4年銘盤龍鏡の同型鏡についても、京都府広峯15号墳出土のものと辰馬考古資料館所蔵のものが同一時期、同一場所で製作されたとは考えにくい。

一方、青龍3年銘方格規矩四神鏡の同型鏡に関しては、京都府大田南5号墳出土のものと個人蔵のものは類似指数が0.1%以下で同一時期同一場所で製作された可

能性が高い。ところで表5を注意して見ると、同型鏡ではないが紀年鏡の間に極めて鉛同位体類似指数の近いものが数多く存在していることに気づく。すなわち正始元年銘森尾鏡と景初4年銘辰馬鏡は類似指数が0.022%で、同一鏡内の分析値よりも近い関係を示しており、これを他人の空似と見過ごすわけにはゆかない。また正始元年銘柴崎鏡と景初4年銘広峯鏡の関係も類似指数が0.053%となっており、同時に製作された可能性を有している。これらの関係をわかりやすく示すと、鉛同位体類似指数からはAとBのグループに分かれて製作された状況を示唆している。

Aグループ	—————	Bグループ
正始元年森尾鏡	—————	正始元年柴崎鏡
景初4年辰馬鏡	—————	景初4年広峯鏡

表5 紀年鏡の相互間の鉛同位体類似指数（同型鏡でも似ていないものと型は異なっても似ているものにアミかけ）

鏡出土地	鏡名称		S2	S3	V1	V2	W1	W2	B1	B2
群馬県柴崎蟹沢古墳 山口県竹島古墳 兵庫県森尾古墳	正始元年三角縁神獸鏡	S1	0.278	0.209	0.048	0.203	0.244	0.156	0.338	0.353
		S2		0.154	0.201	0.132	0.189	0.138	0.183	0.149
		S3	0.154		0.246	0.022	0.053	0.053	0.129	0.144
京都府広峯15号墳 辰馬考古資料館	景初4年盤龍鏡	V1	0.201	0.246		0.239	0.280	0.193	0.375	0.389
		V2	0.132	0.022	0.239		0.068	0.047	0.136	0.150
京都府大田南5号墳 出所地不明、個人蔵	青龍3年方格規矩鏡	W1	0.189	0.053	0.280	0.068		0.091	0.095	0.109
		W2	0.138	0.053	0.193	0.047	0.091		0.182	0.197
島根県神原神社古墳	景初3年三角縁神獸鏡	B1	0.183	0.129	0.375	0.136	0.095	0.182		0.038
		B2	0.149	0.144	0.389	0.150	0.109	0.197	0.038	
大阪府黄金塚古墳	景初3年画文帯神獸鏡	Y	0.201	0.130	0.116	0.123	0.164	0.076	0.273	0.258

黄金塚景初3年画文帯神獸鏡と神原神社古墳景初3年三角縁神獸鏡は内区同型

青龍3年大田南鏡

青龍3年個人蔵鏡

すなわち年号の異なる2種類あるいは3種類の紀年鏡がセットとなって、別々の場所で、あるいは別の時期に製作された可能性が高いのである。単純には理解しがたい状況である。

もっとも、すでによく知られているように、景初4年は実際には存在しなかった年号であり、正始元年と同年のことであるから、景初4年と正始元年の2種類の紀年鏡が同一時期同一場所で製作されたとしてもおかしくはない。王仲殊氏の見解によれば、銘文の文言と字体から見て、景初4年盤龍鏡と正始元年三角縁神獸鏡は黄金塚出土の景初3年画文帯神獸鏡とともに同一人の製作と推定されており、その点でも一緒に作られたことは十分に考え得るであろう。

しかしそうすると別の問題が生ずる。2枚ある青龍3年銘方格規矩鏡がいずれもこれらの正始元年森尾鏡あるいは景初4年辰馬鏡と極めて近い類似指数をもっているのである。すなわち、2枚の青龍3年銘方格規矩鏡は正始元年森尾鏡および景初4年辰馬鏡と同時に作られた可能性が極めて高い。そうすると青龍3年（235年）の紀年鏡が正始元年および景初4年（いずれも240年）の紀年鏡と一緒に作られたことになってしまう。

その上、それらの同型鏡である正始元年柴崎鏡と景初4年広峯鏡のセットが、森尾鏡や辰馬鏡のセットとは別に製作された可能性が高いとなると、自ずからひとつの理解にたどり着く。すなわちそれらセットのいずれか、あるいはいずれもが日本で複製された可能性を指し示しているである。もしどちらかのセットが日本で複製されたとするならば、Aのグループである可能性が高い。中国での複製であるならば、年次の異なる紀年鏡を同時

に製作するはずがないからである。

そうであるならば他のBグループが中国で製作されたかと言うとそうとも言えない。ちなみに、Bグループの柴崎鏡や広峯鏡と鉛同位体比が極めてよく似ている仿製鏡に、大和天神山古墳の獸形鏡（広峯鏡と0.031%）、福岡市藤崎10号方形周溝墓の変形文鏡（柴崎鏡と0.015%、広峯鏡と0.034%）と福岡市藤崎7号周溝墓の珠文鏡（柴崎鏡と0.034%）などがあるからである。

なおAグループの青龍3年銘方格規矩鏡は中国鏡の鄂城7号の方格規矩鏡の部分踏み返し鏡であることがすでに知られている。青龍3年鏡が日本で複製されたとするならば、鄂城7号の方格規矩鏡との関係がどうなるのか興味深い問題である。

複製は日本でおこなうのが経済原則

以上の議論によって、三角縁神獸鏡等の複製が日本でもおこなわれていた可能性について示し得たと思う。それは鉛同位体比の解析から得た結果であるが、当時の状況から容易に推論できる結論でもある。すなわち、なによりも三角縁神獸鏡等の大量需要地である日本に、鏡を作る原料や技術（含む複製技術）があったのであるから、複製は日本でおこなうのが経済原則なのである。いわゆる「同范鏡」でない限り、原鏡だけを輸入し、複製を日本でおこなったとするほうが日本らしい行き方だ。それに中国においては同型鏡の存在自体がもともと極めて少ない。同型鏡が存在したとしてもそれは2世紀末以降のものであり、しかも方格規矩鏡の例のように同型鏡の多くは日本出土のものに限られている等の状況なのである。

それに反して、日本における同型鏡は平原古墳墓の

超大型仿製内行花文鏡の例があるように、むしろ時期的にも鑄造技術的にも中国に先行していた。したがって従来舶載鏡として疑われることのなかった方格規矩鏡の中にも日本における複製があると疑ってみるほうが合理的な見方なのである。

原鏡の問題

上の議論によって、三角縁神獸鏡にかぎらず一般の舶載鏡の中にも日本において複製された同型鏡が数多く含まれている可能性を示し得たと思う。しかし、それは原鏡の製作地問題が中国であるか日本であるかとは無関係な議論である。それでは三角縁神獸鏡の原鏡はどうなったのであろうか。どこで原鏡が作られたにせよ300面にもおよぶ三角縁神獸鏡の中に原鏡が一定の割合で含まれているのは疑いないからである。

それをいかにして鉛同位体比の差として検出するかを考えてみよう。原鏡が中国で作られ、複製が日本でおこなわれたとすれば、鉛同位体比に何らかの痕跡を残している可能性がある。しかし原鏡そのものも日本で製作されたとするならば論理的に鉛同位体比を活用して識別することは困難である。

その意味で図3を再度注目してみたい。そこには大部分の三角縁神獸鏡がB領域にある中で、3点の鏡がC領域に分布している。C領域は鉛同位体比的にも中国鏡の可能性が高い領域であるから、まずこれらの鏡が中国で作られた原鏡としての有力候補と見なせるであろう。3鏡の内容を表6に示す。

注目すべきことは、これらの三角縁神獸鏡がいずれも図柄配置がG'と分類されるグループに属し、他の三角縁神獸鏡と様式的にも異なっていることである。しかもこのうちの2面については、同型であり、相互の鉛同位体類似指数も近い(0.056%)ので、おそらく同時に製作されたものであろう。形式的にはG'のものは、四神四獸鏡の系列に属し、舶載鏡5期のうちの4期に分類されている。これらの図柄配置G'の場合だけが、C領域に分布しているのを偶然と見なすわけにもゆかないが、逆に、型的に4期に属するものだけが原鏡として見つ

表6 特異な鉛同位体比を有する三角縁神獸鏡(図柄配置G')

鏡出土地	鏡名称	Pb206 /Pb204	Pb207 /Pb206	Pb208 /Pb206
岡京市長法寺 南原古墳	獸帯四神四獸鏡	18.394	0.8523	2.1140
椿井大塚18	獸帯四神四獸鏡	18.426	0.8514	2.1121
椿井大塚17	鋸齒文帯四神四 獸鏡	18.444	0.8524	2.1149

かっていることも考えにくい。残念ながら、中国出土の魏晉鏡の鉛同位体比分析がおこなわれるまでは、このへんが限界であろう。

長方形鈕孔はロストワックス法

三角縁神獸鏡などでは複製がしばしばおこなわれていたので、鏡の図柄様式の変化をもとにしてどこで製作されたものか議論することができないことについては繰り返し触れてきた。その点、鉛同位体比の分析からのアプローチは有力な方法ではあるが、日本において製作された複製鏡の存在を裏づける結果とはなかったが、原鏡の製作地については踏み込んだ議論ができなかった。

ところで複製であるか原鏡であるか識別するのにもうひとつのアプローチがある。それは鏡の中央に取り付けられた鈕の孔の形態である。複製においては図柄様式は完全に転写されるが、鈕の孔は鑄造技術に関連するものであり、原鏡と複製鏡で異なることがありうる。事実、同型鏡であっても異なった形の鈕孔をもつ場合がいくつか知られている。

三角縁神獸鏡における鈕孔の形態に初めて目を向けたのは福永伸哉氏である。大部分の中国鏡が舶載鏡を含めて円形または半円形の鈕孔をもつなかで、三角縁神獸鏡が長方形の鈕孔をもち、際立った差異があるというのである。しかもこの長方形鈕孔は三角縁神獸鏡以外にも少数ではあるが、魏の紀年をもつ画文帯鏡や獸首鏡にも認められることから、福永氏はそれを魏鏡の特徴と推定した。中国出土の魏鏡の状況がよくわからない中での大胆な推論ではあったが、はたしてその後、北京市の大宮村や遼寧省、河北省から長方形鈕孔をもつ魏鏡が検出される。これをもとにして福永氏は三角縁神獸鏡が魏鏡であり、卑弥呼の鏡であると従来説を補強した。

それまでの鏡の様式の研究では、三角縁神獸鏡の祖形は各種の神獸鏡や画像鏡すなわち呉鏡とされていて、魏鏡にその源流を見出すことができなかった。そのため王仲殊氏は呉工人日本製作説を唱えており、旧来派は論拠を魏の紀年鏡ばかりに頼るのでなく、様式論としても反撃する必要性があった中でのクリーンヒットであった。

しかし、それは厳密に言えば鏡の製作技術としての位置づけであり、魏鏡に議論を短絡させるのには注意を要する。それは長方形鈕孔が複製技術と密接にからんでいると考えられるからである。

すなわち西川寿勝氏の紹介によれば、長方形鈕孔をもつ方格規矩鏡や飛禽鏡の鈕孔の中には角状の鉄がさび付いて残っているものがあるという。もちろんこの角状の鉄は中子および冷し金の役割をもっていたものである。それに対して円形鈕孔では鑄物砂が残っている例があり、鑄造技術的な差異がある。

複製鏡の有力な作り方にロストワックス法がある。これは通常原范に蠟を流し込み蠟原型を作り、その周りを真土などで包んで鑄型を作る方法であるが、原鏡から原范を作れば複製法としても利用できる。その場合、鈕の中の中子をどうするかが問題である。

蠟原型の鈕の部分にあらかじめ中子を付けておく必要があるが、その**蔡**には鈕孔の穿ちやすさで長方形が最も適しており、また強度面からは砂よりも鉄が適している。すなわち長方形鈕孔はロストワックス法と密接に結びついていると考えられるのである。その**際**には

そうであるならば、同型鏡のうち、長方形鈕孔を有するものは複製鏡、円形あるいは半円形鈕孔を有するものが原型であるとの推測が成り立つ。甘露5年の紀年をもつ獣首鏡には同型鏡があり、黒川古文化研究所のものは長方形、書道博物館のものは半円形の鈕孔をもつというから、書道博物館のものが原型なのではなかろうか。また三角縁神獣鏡にも愛知県東之宮古墳の吾作重列式神獣鏡、京都長岡の新作徐州銘鏡、五島美術館の吾作環状乳鏡などの円形鈕孔の鏡があり、五島美術館のものには長方形鈕孔の同型鏡がある。その意味では、前に検討した紀年鏡はすべて長方形鈕孔であるから、すべて日本における複製鏡である可能性が高い。

様式変化は需要地で起こる

三角縁神獣では精緻な型式変化の研究がおこなわれており、様式的な前後関係をたどれる。しかし三角縁神獣鏡の需要地は明らかに日本であり中国ではなかった。需要地でもない中国で様式的な変化が起こったのはなぜであろうか。中国における一般的な鏡様式の変化を単に反映したものであるならば理解がゆくが、三角縁神獣鏡の場合は他の中国鏡とは異なった独自の変化をたどっているのである。

三角縁神獣鏡は少なくとも日本の需要者の好みを大きく反映した鏡であった。なによりもその大型化がその証拠である。そうであるならばその後の様式変化も需要者側のニーズを反映したものであったはずである。それらのニーズはいかにして中国側に伝えられたので

あろうか。

三角縁神獣鏡の神獣鏡の表現を分析すると、大きく3つの作者集団に分かれているという。しかしそれらの工房に対する発注は誰がおこなったのであろうか。晋魏朝を通じての下賜であるならば、お仕着せであっても仕方がないが、需要者側のニーズもなしに型式が変化し続けるのはやはり不可解である。様式変化は需要者の近くで起こる方が自然である。すでに日本では秀麗な仕上がりの超大型仿製鏡を製作する技術をもっていたし、複製はもとより、部分的な複製を組み合わせる新しい型の鏡を製作する方式も知っていた。紀年銘や銘文など誰かひとりが知識をもっていれば簡単に作り出せる。中国へ使節団を派遣していた倭国に全く漢字の知識がなかったとは到底考えられない。だから漢字問題で製作地を論議するのは本末顛倒なのである。

そのように考えるならば、三角縁神獣鏡の原鏡でさえも中国産としなければならない根拠は何もない。技術というものは需要のあるところに発達するものである。日本には需要があり、しかも製作技術があった。複製を巧みに組み合わせながら、不足する部分を日本的な方式で埋め合わせてゆく過程で、様式変化が起こったと考える方が素直なのである。

仿製三角縁神獣鏡の問題

いわゆる舶載三角縁神獣鏡の中には複製品や部分的な複製品があり、それらの複製製作は中国ではなく日本でおこなわれたというのが、鉛同位体比の分析から得られた結論である。その原鏡がどこで製作されたかについては、未だ疑問とすべきであるが、様式論的にも技術的にも需要形態的にも日本で製作された可能性を排除することはできない。それは三角縁神獣鏡が中国で発見されたとしても変わらない推論である。

もう少し様式論を続けよう。ご承知のように三角縁神獣鏡には仿製鏡が多数ある。これらは舶載鏡とは異なり日本で製作されたことについて従来から異論はなかった。いやこの仿製三角縁神獣鏡が有るがゆえに舶載鏡の存在が主張された面も大きいのである。

しかし研究が進めば進むほど舶載鏡と仿製鏡の境界があやふやになってきた。紫金山古墳ほかから出土した唐草文帯三神二獣鏡は、舶載鏡の踏み返しに小乳列を追加したものであり、明らかに舶載鏡的な性格と仿製鏡的な性格を併せもっているし、城の山古墳出土の三神三獣鏡のように学者によってどちらに分類するか見解

の分かれているものもある。そしてそのきわまりが車崎正彦氏による仿製三角縁神獸鏡も中国製だとする学説なのである。

ところで、すでに図3に示したように三角縁神獸鏡の鉛同位体比の分布を見ると、明らかに舶載鏡と仿製鏡では分布が異なっている。これを詳細に観察するため、その部分を拡大して図8に示す。

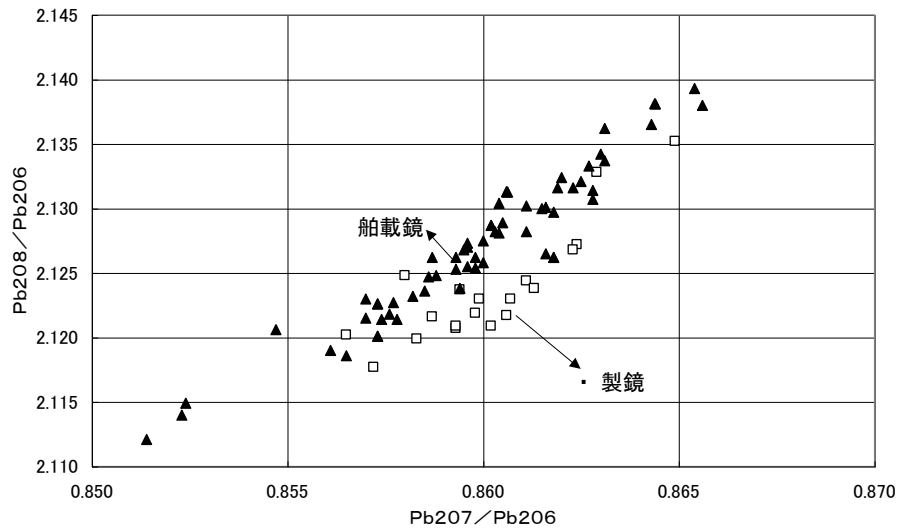
舶載鏡と仿製鏡の境界があいまいとしている割には、鉛同位体比の分布ははっきりと分かれているのである。三角縁神獸鏡の様式変化からいえば、仿製鏡は舶載鏡の最終期（5期）のあとに来るのであるから、これは時代的な差を反映したものかも知れない。それにしてもこの差は何から来たものであろうか。

じつはこの仿製三角縁神獸鏡の鉛同位体比と極めてよく似ている青銅器が韓国の天安市から出土している。2世紀末から3世紀末の清堂洞遺跡から出た青銅馬形帯鉤である。

この馬形帯鉤は昨年9月長野県浅川端遺跡からも出土し、3世紀の朝鮮半島との密接な交流を裏づけるものとして注目されたことがあるが、時代的にはまさに邪馬台国の時代の産品である。

この天安市清堂洞遺跡の馬形帯鉤と仿製三角縁神獸鏡の鉛同位体比を比較して図9に示す。この図から明らかのように、一部の仿製三角縁神獸鏡の鉛同位体比は

図8 三角縁神獸鏡(舶載・製)



完全に韓国産の馬形帯鉤と一致しているのである。しかもこのような分布を示すものは、各種の舶載鏡や仿製鏡にもほとんど見当たらない。図貼り込み 仿仿仿仿

天安市の馬形帯鉤が3世紀頃朝鮮半島で作られたことはまず疑いない。その鉛同位体比と同一のものが、仿製三角縁神獸鏡の一部に認められることは三角縁神獸鏡の製作地を考える上で重要なヒントとなる。

もちろんこのことから仿製三角縁神獸鏡が朝鮮半島で製作されたと主張するつもりはない。単に朝鮮半島と同じ原料源を使用していた可能性を示すに過ぎないからである。しかし西川寿勝氏が主張しているように舶載三角縁神獸鏡は楽浪製だとする見解もある。

以上、久しぶりに三角縁神獸鏡製作地論争に「金属を通して」参加してみた。従来の論争にない視点からアプローチであり、それなりの収穫もあったと思うが、まだまだデータ不足である。しかし結論的にいえば、三角縁神獸鏡のほとんどが日本で複製されたものであり、その原鏡そのものも、中国鏡をモデルとして、部分複製に変形を加えたものではなかろうかと考えている。卑弥呼に下賜された100枚の鏡をもとにして、その後日本の好みや事情に合わせて製作されたのが三角縁神獸鏡なのではなかろうか。

図9 韓国馬形帯鉤と・製三角縁神獸鏡

